

東北 VALUE SIGHT 宮城



宮城MAX 監督
岩佐 義明 (いわさ・よしあき)

1958年1月、宮城県山元町出身。
大学までバスケットボール選手として活躍し、卒業後、
宮城県障害者総合体育センターに勤務。
2001年より「宮城MAX」のヘッドコーチを務め、チ
ームを日本選手権8連覇に導く。
「2008北京パラリンピック」車椅子バスケット女子日本代
表ヘッドコーチ、「2012ロンドンパラリンピック」車
椅子バスケット男子日本代表ヘッドコーチを歴任。

宮城MAX
URL : <http://miyagimax.com>
E-mail : m-shiina@navy.plala.or.jp

障害者スポーツの中で最大の競技人口があり、古い
歴史を有する車椅子バスケットボール。

仙台市を拠点に活動する車椅子バスケットボール
チーム「宮城MAX」は、今年5月に開催された内閣総
理大臣杯争奪第44回日本車椅子バスケットボール選
手権大会に優勝し、同選手権8連覇を達成。障害者ス
ポーツのトップアスリート集団として、日々進化を続
けている。

車椅子バスケットボールの新たな高みへ 宮城MAXの挑戦

転機は2001年の宮城国体3位

車椅子バスケットボール（以下、車椅子バスケ）
は全国の登録チーム数が約160、未登録のチームも
含めれば約200チームが活動する障害者スポーツで
ある。

宮城MAXは仙台市を本拠地に1990年代から活動
していたが、東北の中にあってもなかなか優勝でき
ない時代が続いた。2001年の宮城国体、正式には第
1回全国障害者スポーツ大会（通常の国体の約1カ
月後に開催。これ以前は、身体障害者と知的障害者
の大会は別れていたが、この大会から両者が一本化。
ゆえに、第1回となった）において、準決勝で強敵・
千葉県に敗れたものの3位になった。懸命に練
習してきた成果を発揮できて手応えを感じた。これ
が成長への転機だったと思う。

勝利のために何を变えたか

当時、車椅子バスケは1試合30点台～40点台の
ロースコアのゲームが主流で、試合展開が遅かった。
ボールを獲得してから30秒以内にシュートする（現
在は24秒以内）ルールであったが、30秒ギリギリま
で時間を使うためトータルとして得点が入らないの
である。これではいけないと思い、私は研究を重ね
た。

その結果、「早打ち」と言われても構わないから相
手守備陣が整わないうちに攻撃・シュートをする
アーリー・オフENSEを仕掛けることとし、その練
習を徹底して行った。その際、最も必要とされるの
はスピードである。加えてチェア・スキル（車椅子
の基本操作）。練習前30分～40分、これを養うための
トレーニングを徹底して行った。これは非常にハー

ドである。

さらに、健常者が行うバスケットボール（以下、
一般バスケ）ではできる練習でも車椅子バスケでは
できない練習はあったが、工夫・研究をして一般バ
スケの練習を車椅子バスケ向きにアレンジしてどん
どん取り入れた。バスケットボールはストップ・
ダッシュの連続であるが、車椅子で一旦止まってから
再び動き出すことは非常にきつい。しかし、きつ
いストップ・ダッシュの練習も繰り返し行った。

中学、高校の先生に私の大学時代の同期生や先輩
も多くいたこともあって、選手たちは一般バスケの
練習や試合を何度も見に行った。一般バスケの練習
を参考にして、車椅子バスケ向きに工夫したのであ
る。

アスリートとして認められること

選手たちは、仕事をしながら、あるいはベテラン
になれば結婚して家庭を持ちながら週3回～4回の
練習に参加し、試合に出場している。確かに負担は
小さくない。それでも選手たちが車椅子バスケに打
ち込むのは、このスポーツに対する強い意欲と勝利
への渴望があるからであり、そのため、むしろ熱い
指導、厳しい練習を待ち望んでいたのではないかと
思う。

障害者スポーツは、どうしても福祉的な要素、観
点から扱われがちで、健常者のスポーツとは違った
目で見られてきた時期があったと思う。誤解を恐れ
ずに言えば、「弱者」のスポーツのイメージである。
私は長年、こうした障害者スポーツのとらえられ方

を何とか払拭したいと思っていた。宮城MAXの練
習や車椅子バスケの試合をご覧いただければ分かる
が、選手たちはまぎれもないアスリートである。妥
協を排した練習、チーム一丸となって勝利をつかみ
取ろうとする意思、すべてが健常者と何ら変わらない
アスリートとして認められようとする姿勢・意欲
の表れであると感じる。

今、アスリートとしてさまざまな学校を訪問した
り、大会もテレビ放映され、結果が新聞のスポーツ
欄に掲載されるなど、障害者スポーツが世間に認め
られるようになった。そうしたことは選手にも私に
とっても目標であったし、現在では大きな励みと
なっている。

支えてくださるすべての方々のために

宮城MAXの活動では、例えば大会への出場、遠
征となればチーム全員で移動するし宿泊
費も掛かる。その経費をかつては選手が
すべて“自腹”でまかっていたので、
個人の負担が大きかった。

今、スポンサーによる経済的な支援は
チーム運営に不可欠である。現在は幸い
にも大口のスポンサー企業3社をはじめ
多くの企業スポンサー、個人の方々
に支えていただいている。中には、「君
たちは宮城の誇り、東北の代表だから」
という
ことで、ユニフォーム等にスポンサー
企業のロゴを入れなくても構わないから
支援すると言ってくれる企業もある。本

当にありがたいことである。感謝の気持ちでいっ
ぱいである。宮城MAXは、支えてくださるすべての
方々の応援に応えるためにも日本一であり続ける、
そのために戦い続ける。その思いはチーム全員に共
有されている。

これからの宮城MAX ～目指すはTOKYO 2020～

今年のリオ・パラリンピック日本代表チームには
宮城MAXから3名の選手を送り出しているが、私
個人の頭の中には2020年・パラリンピック東京大会
のことが常にある。そこに向けて多くの選手を日本
代表チームに送り出したいと思う。

宮城MAXは、より良いバスケ、世界に通用するバ
スケを目指して、これからもチームに磨きをかけた
い。そうすることが一人でも多くの世界に通用する
選手を生み出すことにつながると信じるからである。



内閣総理大臣杯争奪第44回日本車椅子バスケットボール選手権大会の表彰式
笑顔の宮城MAXの選手たち（撮影：越智貴雄/カンパラプレス）